

腹部超音波検診の基本と展望

新生会高の原中央病院 人間ドックセンター・放射線科

齊藤 弥穂

近年、任意型検診としての腹部超音波検診は受診者の期待が高く、早期発見の役割が一層重要となっています。本講演では、最新の全国集計データを基に超音波検診の現状を整理し、特に悪性疾患の発見頻度の高い臓器に着目しながら、基本走査の重要性と見逃し低減のためのポイントについて概説します。

2022 年度消化器がん検診全国集計は、2024 年度に調査が施行された最新のデータです。全国 338 施設が参加し、受診者数は約 136 万人でした。2022 年はコロナ感染者数が最大規模であった時期ではありましたが、2020 年の政府による緊急事態宣言下の社会的制限（飲食店の時短・営業自粛、健診控えなど）から規制緩和へと移行した年でもあり、コロナ禍からの回復と健診の意義がみえてくる時期であったと考えられます。

超音波検診は、自治体が提供する「対策型検診」とは異なり、受診者が自身の判断で申し込む「任意型検診」です。対策型検診は公的な指針に基づき、自治体のがん検診（胃・肺・大腸・乳・子宮など）として提供されますが、任意型検診は個人の健康維持や病気の早期発見を目的としており、法的・制度的な位置づけが異なります。実施主体も人間ドックや職場健診など多岐にわたり、受診者が検査項目を選択して受診します。そのため、日本消化器がん検診学会などの専門学会が主導して「検診判定マニュアル」や「全国集計」を整備し、精度管理が行われています。

全国集計では、発見された悪性疾患は腎臓、膵臓、肝臓の順に多く、いずれの臓器においても精検受診率が高い特徴があります。超音波検診は短時間で全腹部臓器を評価するスクリーニング検査であり、「見逃しの低減」が最大の課題です。

本講演では、他セッションで膵臓の講演が予定されているため、肝臓および腎臓に焦点を当てて解説します。精度向上のために重要となる、解剖学的理解に基づいた基本走査と死角の認識、多方向観察や体位変換といった実践的手技について提示します。

現在、超音波検査は職域検診などにも積極的に取り入れられるようになってきています。我々実施施設には、希望される受診者すべての方に対して精度の高い検査を提供する責務があると考えています。